

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑪

＊ 塔の街の記憶： 白い女王と黒い羊 ＊

緋月 まや

サン・ジミニャーノは「塔の街」だ。フィレンツェから南西に六十キロ、小高い丘の上に立つその小さなまちでは千年の昔、貴族たちが富と権力の象徴として、高さを競い合って塔を建てた。往時は七十以上もの塔が立ち並び、今なお十四の塔が残されている。「白の女王」は、この「塔の街」で生まれた。トスカーナが誇る白ワイン「ヴェルナッチャ・ディ・サン・ジミニャーノ」のことを、地元の人たちは愛と敬意を込めてそう呼ぶ。城壁に囲まれたそのまちの玄関口であるサン・ジョバンニ門をくぐる。するともう、小さな一本道の向こうに、「グロッサの塔」が見えている。高さ五十四メートル、まち一番の巨塔だ。グロッサの塔を目指して歩いていくと、まちの中心ドゥオモ広場に着く。広場の真ん中に立ってぐるっと三百六十度を見回せば、グロッサの塔の他にも、あちこちで石造りの塔が空を仰いでいる。まさに、中世の摩天楼だ。グロッサの塔に入って、二百十八段ある四角い螺旋階段を上ると、塔の頂上に出た。

眼下に、葡萄畑が広がっていた。「白の女王」の畑だ。ワイン大国イタリアのワインには、法律で定められた格付けがある。どこの畑で育った葡萄で造られたワインであるのか、その由緒が格付けを大きく左右する。六十年前、イタリアでこのワイン法が制定された時、格付け最高位の栄えある第一号として認定されたワインこそ、この「白の女

王」である。ワインの原産地を明示することでワインの格付けをする。この考え方は、もうひとつのワイン大国フランスにおいても、EU（欧州連合）のワイン法においても同様である。現在では世界基準のこのアイデアを、世界で初めて思いついたのは、今から三百年以上前のこと、ヨーロッパ史に名高い大富豪、あのメディチ家最後期の当主のひとりであった。



【グロッサの塔からの眺望】

*

巨万の富で歴史に数々の足跡を残したメディチ家の興隆はとりわけフィレンツェにおけるメディチ銀行の成功に負うものであった。14世紀末、メディチ銀行はローマ教皇庁を顧客とすることによって、蓄財が一気に加速する。こうして、君主が存

在してはならないはずの共和制下のフィレンツェで、メディチ家は事実上の君主としての地位を築いていった。最も有名なのは、ロレンツォ＝イル＝マニフィコだ。ミケランジェロ、レオナルド＝ダ＝ヴィンチらイタリアの至宝となる芸術家を支援し、ヨーロッパを牽引したルネサンス文化のパトロンとして名高い。ロレンツォの息子はローマ教皇にまで上り詰めた。その後は一時、政界の風向きが変わり、フィレンツェから追放された時期もあったメディチ家だが、フィレンツェ共和国の終焉と共に復権を遂げる。今度は、トスカーナ大公国の君主家として権力の座に就いた。フィレンツェが周辺に領土を拡大する形で成立したトスカーナ大公国は、現在のトスカーナ州とほぼ同一の地理的領域を占めた。初代大公コジモ1世はウッフィーツィ宮殿の建設を手始めに、今日のフィレンツェの都市景観を造りあげた。この宮殿こそ、ルネサンス絵画の宝庫としてあまりにも有名な現在のウッフィーツィ美術館である。その息子のフェルディナンド1世は外交に長け、貿易振興によって国の経済を活性化させた。続く歴代大公も、地動説を証明した「近代科学の父」ガリレオ・ガリレイとその弟子たちのパトロンを務め、科学の発展に寄与している。ところが、第六代大公コジモ3世の治世ときたら全くもって冴えない。フランス国王ルイ 14 世の従妹を妻に迎えたコジモ3世は、政治に無関心で、財政悪化に苦しんでいた国の窮状を傍観し、トスカーナをヨーロッパの最貧国にまで貶めた君主として知られる。生涯を悪妻に振り回され続けただつの上がない夫のイメージばかりが際立つ。せめてものメディチ家のお家芸である芸術や学術の振興に貢献することさえできなかった。こうして、メディチ家の治世は、コジモ3世の息子の代で幕を閉じる。三百年以上に及ぶ、支配者としてのメディチ家の終焉を招いたこのコジモ3世、しかし彼こそが、今日では世界標準のルールであるワイン格付け法の礎を築いた、その人なのである。

コジモ3世の大公時代、トスカーナの代名詞である赤ワイン「キアンティ」の人气が高まり、それと共に「キアンティ」を名乗る偽物が横行するようになっていた。そこで 1716 年、コジモ3世はトスカ

ーナのワイン産地に境界線を引いた。それぞれのエリアを明確にして、他の産地で造られたワインが勝手にその呼称を名乗ることを禁じたのである。「白の女王」を例に取れば、サン・ジミニャーノの地で栽培されたヴェルナツチャという白葡萄を使い、厳正な生産基準をクリアして醸造された高品質のワインだけが、その名を名乗ることが許されるということだ。コジモ3世のワイン産地規制法は、ワインの品質を向上させる原動力となり、トスカーナワインへの世界的評判を高めていった。この原産地保護の取り組みこそが、1963 年にイタリア全土で制定されたワイン法「DOC (Denominazione di Origine Controllata／統制原産地呼称)」の原点である。「ヴェルナツチャ・ディ・サン・ジミニャーノ」は、数多あるイタリアワインの中から一番初めに最高ランクの DOC に認定された後、1980 年に新たな最高位として「DOCG (Denominazione di Origine Controllata e Garantita／統制保証原産地呼称)」が DOC の上に設定されると、やがて DOCG ワインに昇格した。現在、DOCG に指定されているワインは七十八種類ある。二十州から構成されるイタリアで、トスカーナ州は十一種もの DOCG ワインを数える



銘醸地であるが、その中で白ワインはひとつだけ。「ヴェルナツチャ・ディ・サン・ジミニャーノ」が「白の女王」と呼ばれる所以だ。淡い麦わら色が特徴で、香りはフルーティーだが、口に含んでみるとミネラル

感がある。それは、サン・ジミニャーノの大地だけが造り出すことのできる滋味なのである。



【サン・ジミニャーノの夕景】

*

グロッサの塔から、改めて、眼下に映る中世の摩天楼を見回してみる。二塔を並べて建て、足した合計ではグロッサの塔より高いのが自慢だった「双子の塔」、塔の主が旅行から帰ると、ひとりだけで背が高くなっていったという伝説を持つ「悪魔の塔」……。どの塔もよく似たセピア色の石造りで、形は同じ四角柱だ。同じ色、同じ形で、ひたすらに高さを競っていたのだ。高いことが、尊いこと。それが、その時代の塔に対する価値観だったのだ。けれど、人間の生き方は、単一の尺度ではその価値を測ることはできない。それは、どこに光を当てかで、色も輝き方も全く違って見えるプリズムのようなものだ。コジモ3世が、まさにそうである。コジモ3世は、一国家の長としては精彩を欠いた君主だったのかもしれない。だが、ワインへの情熱については、ワインを愛したと言われるメディチ家の中でも、誰にも負けないほど強かったのかもしれない。その結果、イタリアワインに対する世界的信用を切り開いたその始祖がコジモ3世だったとすれば、現代イタリアにおけるその功績は、歴代メディチ家当主の中でも最高ランクに値する圧倒的な輝きを放っている。イタリア語

には pecora nera という表現がある。直訳すれば「黒い羊」だが、「厄介者」「できそこない」の意味で使われることが多い。Sono la pecora nera della famiglia (僕なんか、どうせ家族の厄介者なんだ) というように、集団の中で孤立する異質な存在を指して使われる。キリスト教において、群れで動き、臆病で、羊飼いがいなければどこに行ったらいいのかもわからない羊は、人間を暗喩するものである。黒い羊が忌み嫌われたのは、白い羊のように毛を染色することができず、用途に広がりなかったからだ。けれど、別の視点から見れば、黒い羊には希少価値があり、その黒い羊毛は貴族しか身につけることのできない貴重品であった。コジモ3世は、メディチ家における「黒い羊」だったのかもしれない。「白の女王」の葡萄畑を眺めながら、私は「黒い羊」の孤高に思いを馳せた。サン・ジミニャーノの大地を照らす夕陽が眩しかった。

(ライター、イタリアソムリエ協会/AIS 認定ソムリエ)

「異形」の集合住宅から 郊外を考える

二宮 大輔

初めてイタリアの郊外に興味を持ったのはいつだったか。これは明確に覚えている。コルヴィアーレに行ったときだ。この会報誌でもむかし書いたが、誰も覚えていないと思うのでしつこく繰り返そう(編注:2019年2月号)。当時ローマ第三大学の学部生だった私は、ある口頭試験の課題本を借りるべく、コルヴィアーレの図書館に赴いた。当時のローマ市は19の行政区に分かれており、それぞれの区に図書館が少なくとも一つあった。インターネットで蔵書目録を調べたところ、お目当ての本はローマ市南西に位置する第11行政区のコルヴィアーレの図書館にあるようだ。こうして家の近所の停留所からバスに揺られること20分、私は目的地に到着した。目録検索時はまったく想像していなかったが、実際に来てみて驚いた。図書館のある通りの向こう側に、全長数キロはあろうかというコンクリート打ちっばなしの巨大な集合住宅がそびえ立っていたのだ。

その大きさに気おされながら課題本を借りて帰宅した。改めて調べてみると、私が目撃した集合住宅の正式名称はヌオーヴォ・コルヴィアーレ。ローマ市の人口増加に伴う都市計画の一環として1984年に完成したが、住環境は劣化し近年は治安がよろしくないらしい。高さ30メートル、全長約1キロで、横長の見た目から、「大きなヘビ」を意味するセルペントーネの愛称で親しまれているとのことだった。

当時のことを改めて思い返してみると、まず私の興味を引いたのは確かにその見た目だった。風雨にさらされて汚れたコンクリートの壁面に、見渡す限り窓が並んでいて、なかにはガラスのない窓枠だけのものもあったと記憶している。失礼ながら荒んでいるということばがぴったりにくる見た目だった。

1950年代から欧米を中心につくられはじめた、装飾の少ない無骨なコンクリートの建築様式をブルータリズム建築という。2024年に邦訳が出版さ

れた写真集『イタリアのブルータリズム建築』(ロベルト・コンテ、ステファノ・ペレゴ編/写真、石田亜矢子訳、グラフィック社)では、ヌオーヴォ・コルヴィアーレも取り上げられている。その序文でイギリスの建築史家エイドリアン・フォーティは「イタリアの建築家たちは、コンクリートと言う素材に対して独自のスタイルで向き合う方法を生み出していた」と述べている。曰く、コンクリートは「能動性」と「受動性」、「滑らかさ」と「粗さ」など、二面性を有するユニークな建材であり、「イタリアの建築家たちは多くの例において相反する性質を公然と共存させた」。私の勝手な解釈だが、新しいデザインなのに古びていて、堅牢でいながら荒廃しているセルペントーネは、コンクリートの二面性を象徴する一例と言えるのではないだろうか。当時はブルータリズム建築のことなどまったく知らなかったが、その異様な見た目に強く引き付けられたのは確かだった。



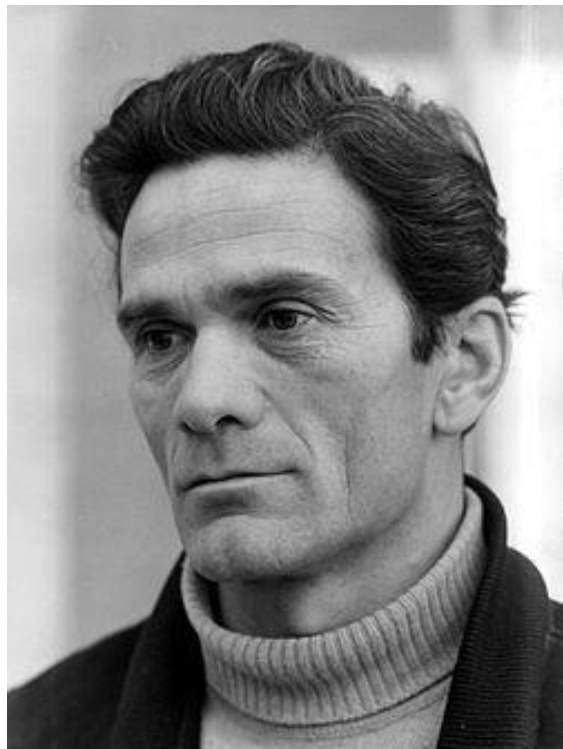
【コルヴィアーレ】

出典元: <https://it.wikipedia.org/wiki/Corviale>

こうして私は、ドラマやテレビでイタリアに点在する郊外を知っては、行ける範囲で実際に訪れて、言わば「郊外愛」を一人で勝手に育てていった。いずれも共通しているのは、治安の悪そうな、荒んだ巨大集合住宅があるという点だ。とは言っても、建築の門外漢である私が、建築様式のみ魅せられたというわけではない。ここまで郊外に執着するようになった理由は、自分でもまだ上手く説明できないし、だからこそ文章にしてじっくり考えようとしているのだ。だが、一つ答えを出すヒントになりそうなのは、パゾリーニである。

20世紀のイタリアを代表する詩人で作家で映画監督のピエル・パオロ・パゾリーニ。彼は、戦後

すぐのころ北イタリアで教職に就いていたが、未成年の青年らへの淫行の容疑がかけられ、1950年にローマに移住を余儀なくされる。移住して目にしたのは、ローマのボルガータと呼ばれる貧困層が住む郊外地域だ。パゾリーニは貧困をものともせず、粗野に、したたかに、だが純粋に生きるボルガータの人びとに衝撃を受け、その経験をもとに小説を書き、さらに映画を撮影した。



【ピエル・パオロ・パゾリーニ】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Pier_Paolo_Pasolini

例えば 1961 年の長編映画処女作『アッカトーネ』の主人公ヴィットリオ・カタルディがそうだ。無職のヴィットリオは売春婦のヒモとして暮らしているが、彼女が逮捕されたことで生活が困窮する。そんななかでもふてぶてしく、仲間たちとつるんでバールのテーブルに集い、冗談を言い合って日々を過ごしている。不幸な結末を迎えるヴィットリオだが、そういった仲間とのやりとりからは、まさにあふれんばかりの猥雑なエネルギーを感じる。

パゾリーニが『アッカトーネ』を撮影していたころと時を同じくして、イタリアは「奇跡の経済」と言われる経済成長を遂げる。こうして郊外が大々的に開発され、巨大集合住宅が立ち並んだ。コルヴィアーレと同じく、それら集合住宅の多くは今や荒んで怪しい雰囲気漂っているが、そんな場所に

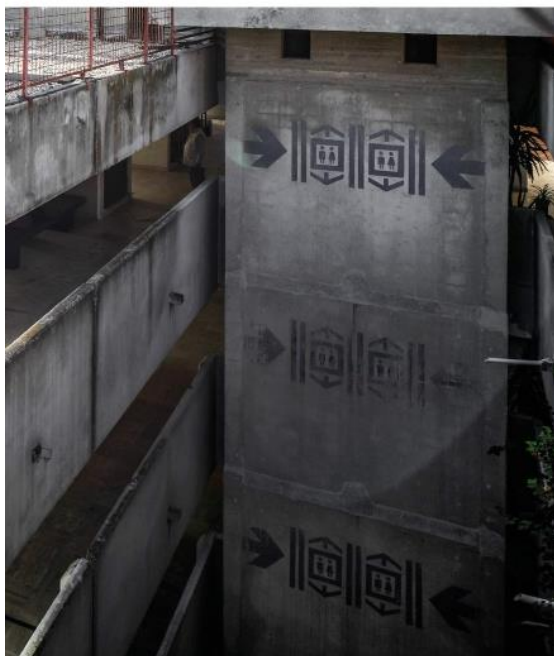
も人々の生活の営みが確かにあることが、郊外を訪れてみるとよくわかった。私にとってその事実は感動的でした。

文学史に名が刻まれたパゾリーニと私の体験を並列するのはおこがましいし、彼が体験したボルガータと、現代の集合住宅はもちろん別物である。だが、そこには連綿と続く郊外の心性があるように思われる。そして何より私は、遺跡や教会がひしめくローマの中心部ではなく、郊外にこそイタリアの本質があるのではないかと、直感的に感じ取ってしまったのだ。直感だけではまずいので、これから数回に分けて、郊外の魅力を確認すべく論考を進めたい。その宣言というか、前置きとして、今この文章を書いている次第だ。

この決意にいたるのを後押ししてくれた本が二冊ある。一冊は『サバービアの憂鬱』(大場正明著、角川新書)だ。映画評論家の著者が、スティーヴン・スピルバーグの映画に郊外を舞台にしたものが多いことからアメリカの郊外(=サバービア)に興味を持ち、その発展と変容を映画や小説を引用しながら解説した大著だ。もともとは 1993 年に出版され絶版になっていたのだが、2023 年に復刊されたというニュースを新聞の文化欄が何かで知り、郊外好きの私は飛びつくように購入したというわけだ。

郊外のなかでも具体的なテーマになっているのは 1950 年代から 1990 年代までのアメリカの郊外住宅とそこに暮らす家族、コミュニティで、1950 年代には家族で理想の生活を送る憧れの地だった郊外が、時代の移り変わりとともに歪んでいく様を分析している。郊外が舞台の映画や小説をたくさん紹介しているようで、実はそれが社会文化論にもなっているところが何となくにうれしい。読了してすぐにこれのイタリア版を書きたいと思った。タイトルをつけるなら、郊外をペリフェリア(periferia)と訳して『ペリフェリアの憂鬱』といったところか。

もう一冊は未邦訳の写真集『100 の公営住宅』(ファビオ・マントヴァーニ写真、Quodlibet)だ。版元の Quodlibet はイタリアの思想・哲学系出版社である。北から南まで、イタリアの名だたる集合住宅が掲載されている郊外好きにはたまらない写真集だ。もちろん建築鑑賞の要素も大きいですが、マントヴァーニの写真はどこか詩的で哀愁が漂っている。ローマのブックフェアでこの本を発見して、表紙がセルベントーネだったこともあり、やはり飛びつくようにして購入した。



【『100 の公営住宅』】

この本の後書きでキュレーターのピエロ・オルランディは我がセルペントーネに触れている。

マントヴァーニは、目に映る対象の美学的、社会的評価が彼個人とは関係ないと確信して、あらゆる場所で正確にシャッターを切る。その醜さでのみ名前が挙がる異形の建築物コルヴィアーレでさえ、同じようにシャッターを切る。彼は写真の鑑賞者に理解するチャンスを与えたのだ。このアプローチの手法が我々にわからせてくれるのは、写真があればこそ、ここに掲載されているけれど実際には目にしたことのない建築物の多くを知ることができるという事実だ。私はコルヴィアーレに行ったことがない。仮にマントヴァーニがその異形さ、グロテスクさ、巨大さといった要素を強調してコルヴィアーレの写真を撮っていたなら、私は偏見にまみれていただろう。だが彼はそうはしない。私を偏見から遠ざけてくれる。つまり、最も基本的で、有効で正しい課題をやっているのけている。

ここまでさんざん「異様」「荒んだ」という偏見を助長する言葉でコルヴィアーレを紹介してきた私には、背筋が伸びる箴言だ。オルランディの言う

通り、「異形」と形容され、悪いイメージのみで語られるコルヴィアーレだが、マントヴァーニは決してそういった要素を際立たせた見せ方をしない。むしろコルヴィアーレを始めとする集合住宅の本質を、何かで飾り付けることなく提示しているところが彼の写真の魅力である。それを写真ではなく言葉で実行するにはどうすればよいのか。悩ましいところだが、マントヴァーニが撮影した集合住宅の写真を基準点として、郊外を考えてみたいという気持ちにさせられた。というわけで、次回から私の郊外愛の発露にお付き合いいただきたい。

(翻訳家、元当館語学受講生)

<日本一のバリスタ、新たなる挑戦>

「バリスタ界のエンターテイナー」として国内外で活躍を続ける岡田章宏さんをお招きしセミナーを開催します。ご参加お待ちしております。

- ・講 師: 岡田 章宏 (Okaffe オーナー・バリスタ)
- ・日 程: 2025 年 12 月 6 日 (土) 15:00~17:00
- ・場 所: 日本イタリア会館 京都本校
- ・受講料: 一般: 3,000 円、個人維持会員: 2,000 円



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <https://italiakaikan.jp/>